

季報

住宅金融

2018年度
No.46
夏号

記憶の家・未来の家

辰巳 琢郎

家は暮らしのベースー 働く原動力になっています

役者としてはもちろん、芸能界きっての知性派として
芸術、食、ワインなど幅広い分野で活躍する辰巳琢郎さん。
住まいへの造詣も深く、23年前には、
こだわりのつまつた素敵なお自宅を建築。
辰巳さんと家との関わりについて、語っていただきました。

JHF 住宅金融支援機構
Japan Housing Finance Agency



辰巳 琢郎 (たつみ たくろう)

Profile

1958年生まれ。京都大学文学部在学中、『劇団そとばこまち』を主宰し、プロデューサー、演出家として80年代前半の学生演劇ブームの立役者となる。卒業と同時にNHK朝の連続テレビ小説『ロマンス』で全国区デビュー。以来、知性・品格・遊び心と三拍子揃った俳優として幅広く活躍する。『辰巳琢郎のくいしん坊!万才』以降、食通としても知られ、ワインをテーマとする『辰巳琢郎の葡萄酒浪漫』では長年ホストを務める。

自宅を建てるときの理想は “暖炉のある家”だった

“家”には若いときから興味がありました。最も大きな買い物ですし、人生設計にかかわってくるものですから。男の場合、家にいる時間は少ないけれど、生活のベースとなるのはやっぱり家。逆に、家に興味のない人なんて、いないんじゃないですか？

今のお宅を建てたのは23年前のこと。ちょうど林真理子さんがかけ出しの頃下宿されていた家が売りに出していたんです。「真理子先生がそこから文壇のスターになった運気の良い土地」と信じて購入しました。

15年前には、自宅の隣に“離れ”も建てました。隣接する土地が売りに出て、しかも角地だったので、「この土地は絶対買うべきだ」と司葉子さんにすすめられて。最初は買うつもりはなかったんですけど、これも出合いました。ですからもう、ずっと借金生活（笑）。大変ですけど、家を持つことは仕事をするための原動力や活力になっているのは確かですね。離れば地上3階地下1階で、ミニコンサートやワイン会を開けるサロンや書斎、ワインセラーを作りました。

家を建てるとき、夢だったのは“暖炉のある家”。火つて、人間が動物から離れる最も原始的なもので、男性は特に好きみたいですね。結局、地下に暖炉を作っちゃいました。パチパチ燃え盛る炎や、鎮火して静かにはざる熾火。変幻自在な火をぼーっと眺める生活は理想ですよね。暖炉のある部屋の隣には6畳の和室も造ったんですけど、ここがまた落ち着くんです。畳に布団を敷いて最近は寝て

います。本当、のんびりできるんですよ。ただ、せっかく作った暖炉も、時間がなくてここ何年も使っていません。暖冬のせいもありますが…。もう少し余裕のある生活をしたいですね。この冬は久しぶりに火をつけなくちゃなって思っています。

忙しくて家の整理ができないのが、今の悩みですね。本当に物がどんどん増えて、あふれている。それを整理する時間が、今、一番欲しい。きれいにしたほうが快適な生活ができるし、運気も良くなるといわれるし…。でも、なかなか物を捨てられないんです。我々の子どもの頃は、なにしろ物のない時代でしたから、物を大事にしがるんですね。両親はデパートの包装紙なんかもきれいにっていました。絶対使わないのにね（笑）。まあ、それも生活のひとつあります。今はとにかく物があふれているので、早く整理してすっきりしたいですね。

妥協せず、こだわりを持つことが 理想の家を建てるためには必要

「家は3回建てないと理想の家にならない」って、よく言われますけど、まさにその通りですね。それぐらい、理想の家を建てるのは難しい。一度建ててしまうと、リフォームもなかなか大変なので、造る前によく考えることが大事ですね。我が家も何度もリフォームをしているんですが、そのつど、設計士さんとは、よく喧嘩しました（笑）。やっぱり、妥協はしたくないですからね。

結局、家を建てるにしろ、リフォームするにしろ、成功するかどうかは、事前にどれだけ設計士さんとディスカッションし、意思疎通をはかったかで決まると思います。こちらがどんな家を造りたいのかをしっかり伝え、それをまた、設計士さんもよく理解して、具現化する。そのやり取りが重要なことです。たとえば、水回りのリフォームを考えたとき、設計士さんは「床のタイルから壁紙まで、全てを



同じグレードにしないと釣り合いませんよ」と言うかもしれない。でも、例えば蛇口にお金をかけて壁紙は別に安いものでもいい、という考え方だってある。そこをよく話し合わず、言われたまま同ランクのものを採用しちゃうのは、ちょっと違うと思うんです。確かに選択肢が狭まれば、選ぶ方は楽だし、そういうものだと思う人もいるだろうけど、ちゃんと納得できるものを選ばないと、あとで必ず後悔することになります。人の意見に流されず、自分が満足できるかどうかを第一に考える。そういうフレキシブルさが欲しいですね。大きな買い物なのだから、どこにこだわって、どこは抑えて、という言わば“選択と集中”的な考え方方が必要だと思います。

やりたいことがまだ、目白押し 老いを感じている場合じゃない

もし、もう一度住み替えるとしたら、どうだろう。今は都心から少し離れたところに住んでいますけど、自然豊かな田舎暮らしに憧れもあるし、都心での暮らしあるい

かなと思ったりもします。国内外、出かけることが多いので、タクシーに乗って5分10分で新幹線の駅や空港に行ける、便利な場所も良いですね。先日、還暦になつたんですが、まだまだやりたいことがいっぱい、家でのんびり過ごすという生活からは程遠くて（笑）。

8月には、長年連載してきた食に関する本を出版しましたし、秋には舞台もあるし、映画も撮りたいと思っています。数年前からは、近畿大学の客員教授もやっているんですけど、若い学生たちと一緒に年にかを創るというのも刺激的ですね。自分の勉強にもなるし、大事な時間です。あとは、日本ワインの応援も15年間続けています。各地のワイナリーをまわって、できたてのワインを試飲したり造り手といろいろな話をしたり。日本ワインの本も秋に出版する予定です。もちろん、おいしいものもいっぱい食べたいし（笑）。まあ、「老いを意識したときに青春は終わる」といいますから、気持ちはいつまでも若く保ちつつ、いろいろなことをどう次の世代に伝え、どう遺していくか、というところも大切にしながら、今後も好きなことをやっていけたら幸せですね。



辰巳琢郎 集英社 1400円(税別)

食通で知られる著者が、元祖クイズ王らしい名言を交えつつ、カニ、枝豆、みかん、秋刀魚、鰻など、四季折々の48食材を深く掘り下げるエッセイ集。資料を読みあさり、電話取材をし、ときには現地で食べ歩き、忘がたい味の記憶を綴った珠玉の一冊です。